

片山洋子・小川政弘作 「青春グラフィティー 命への絶唱」

<前編>

(効果音) (目覚まし時計の鳴る音)

北山修 シナ！ ヤベ！ 7 時半だ！ 母さん、母さん、なんで起こしてくれないんだよ。
2 学期しよっぱなから遅刻させる気かよ、全く。

母 (大あくび) (ノンビリと)あら、修ちゃん。おはよう。

修 なんだ、なんだ、なんなんだ？ 学校が始まるってのに、親が夏休みボケでい
いのか？ メシはあるのかよ。

母 まだ作ってないけど。アーラ、そうだったわね。今日から学校ね。

修 これだよ。いいのか、そういう態度で?! 子供が非行に走る前兆だぜ、全く。

母 何言ってるの？ 目覚まし 7 時半にかけちゃって、30 分も遅いじゃないの。夏
休みボケはお互い様よ。ご飯抜きでさっさと行ってらっしゃい、学校へ。

《タイトル》

修ナレーション …というわけで、おれは 2 学期早々、かろうじて遅刻は免れたものの、腹が
減っているのも手伝って、ああいう親の態度に非常にイライラした気持ちで、
教室へ駆け込んだ。おれは青春高校 2 年 C 組、北山修。一応、クラス委員な
んぞをしている。成績は中の上ってとこかな。

(効果音) (教室のガヤ)

ナレーション みんな、夏休みの話で持ちきりだ。“ひと夏の経験”、したのかな。

女子 A そうなのよ。軽井沢のテニスパックでさ、渋い大学生と知り合って…(FO)

女子 B あたしなんか、沖縄焼けがまだ…。(FO)

菅野^{かんの}吉彦 ああ、茅ヶ崎でよ、かわいいサーファーの子、うまくナンパしちゃってさ…。
(FO)

(モノローグ) おれだってさ、おれだって、ナンパの 1 人や 2 人、やればできるんだけどなあ。
あーあ、今年もダメだったなあ。

菅野 おい、北山。ちょっと話があるんだけど。

修 なんだよ、菅野。

菅野 いやあ、ちょっと聞いてほしいんだけど…。場所変えてさ。

修 なんだよ、改まって。ああいいよ。じゃ放課後な。

ナレーション 菅野は、ブラバンでクラリネットをやっている。やつとは、高 1 の時から同じク
ラスで、割と何でもよく話し合える友達なんだ。

(効果音) (喫茶店の BGM)

修 何、話って？ なんかあったの？

菅野 おれさ、マイっちゃったよ、あいつに。

修 あいつって？ ああ、彼女？ A 組の島田のこと？

菅野 うん。実はさ、あいつ、飛び込んだんだよ、海に。

修 飛び込んだって？ え、一緒に泳ぎに行ったのかよ。

菅野 違うよ。高いところから、身投げだよ。

修 はあー？ 身投げ？

菅野 そうなんだ。飛び込み自殺。未遂で済んだけど…。

修 ちょ、ちょっと待てよ。なんなんだよ、一体、この話？

菅野 だからさ、マイっちゃったんだよ。あいつの考えすぎでさ。おれがブラバンの合宿で、1 年の女子とちょっと近づいちゃったんだよな。あいつ、感受性の強いやつだから、「もう終わりね」って電話で言ってきたかと思ったら、次の日には、江ノ島の警察から連絡で、あいつが飛び込み自殺したって言うじゃん。焦ったよ、おれ。

修 そりゃ焦るぜ、だれだって。

菅野 江ノ島はさ、思い出の場所なんだよ、二人の。そこで、おれの写真を見たって言うんだよな。そしたら、写真の中のおれが笑って、「その瞬間、ふっと吸い込まれただけなの」って言うんだよな、あいつ。

修 はあ。分かんねえな、女の気持ちって。だけど、やっぱりこれは菅野が悪いな。お前のあいまいな態度が彼女をそこまで追い詰めたんだからな。うん、お前が悪い。

菅野 だけどさあ、死ぬなんて…。大変なことだよ、死を選ぶってことはさあ。どうしてポーンと一足飛びにそこまで行っちゃうのか、分かんないんだよな、おれ。

修 そこが女なんだよ。お前から切り捨てられること、即、死でしかないんだろ、きつと。生きる目的がないから、死ぬっきゃない、って。考えてみりゃ、純粹だよ彼女。目的もなくて、死なないから生きてるって連中がワサワサいる中でよ。それをだ、恋人のお前がどうして彼女の気持ちのそこんところを分かってやらないんだ？ 大体お前はな、人の気持ちってものを考えないんだよな。自分の行動に責任を持てよ、責任を。

ナレーション 我ながら、偉そうに言ってしまった。この言葉が、あとでどんなにおれ自身に降りかかってくるか、その時はまだ知る由もなかった。その事件は数週間後に起 った。

その日、学校へ行くと、クラス中が騒がしかった。

女子 A (ヒソヒソと) そうらしいのよね。あそこの団地の屋上だって。

女子 B ウッソー。ほんと？ やだあ！(泣きべそ)

修 おはよ！ 菅野、なんかあったの？

菅野 た、大変なニュースなんだ。

修 なんだよ。まじめな顔しちゃって。また自殺未遂なんて言うんじゃないだろうな。

菅野 ハズレだ。未遂じゃない。

修 ナヌー！ おい、マジかよ。お前、なんで島田を！

菅野 ち、違う。島田じゃないよ。

修 なんだって？ じゃ、一体…。

女子 A 中井川君よ。中井川智宏くん。

修 な・か・い・がわ？

女子 B 覚えてないんですよ。そうよね。中井川君、2 年になってから、あまり学校に来てなかったし…。

菅野 病気だって言ってたじゃない、先生は？

女子 B うーん、でも本当は違ってたみたい。(FO)

(モノローグ) 焦った。本当に焦った。クラスメートが飛び降り自殺。しかもおれは、その中井川の顔すら覚えていないんだ。確か、ずっと休んでいる男子が一人いた。でも、この間の始業式は、欠席者は一人もいなかったんだから、中井川は来てたんだ。それなのに、おれは顔も思い出せない——。

(音楽) (ブリッジ。暗い感じ)

ナレーション 次の日、中井川の葬式に、クラス委員のおれと、どうしても行きたいって立候補した岡田恵の 2 人が参列した。たったの 2 人だけ…。寂しいもんだ。クラスメートが死んだっていうのに。それだけ中井川の存在が薄かったってわけだ。かわいそうなやつだ、つくづく——。

(音楽) (悲しみ)

ナレーション 葬儀は、火葬場でやった。うちは団地で狭いからだそうだ。

岡田恵 (小声で) 北山君。君の番よ。献花して。

修 え、ケンカ？

恵 中井川君の^{ひつぎ}棺にお花を入れてあげることよ。

修 ああ、献花ね。

(モノローグ) ショックだった。棺おけの中井川の顔。おれ、初めてなんだ、死人を見るのは。死に化粧って言うんだろうか、生きてるみたいな顔色だけど、やっぱり違う…。正直言って、気持ち悪いや。

恵 かわいそうな中井川君。どうして死んだの？ ごめんね、力になってやれなくて。(すすり泣く)

修モノローグ 何も、岡田が謝ることないじゃない。

葬儀場係員 それでは、最後のお別れを。

(効果音) (クギを打つ音)

中井川の母 智宏！ いやあ！ 行かないで！

妹 お兄ちゃ〜ん。燃えちゃうの？

参列者 (すすり泣き) 智宏〜！

修モノローグ 火葬場の煙突って高いんだな。中井川は白い煙になって、どこかへ飛んでいった。人間、しよせんあれか…。何年かこの地上に存在して、とどのつまりは煙と灰かよ。

ナレーション 中井川のおばさんが、帰ろうとしたおれに、一冊のノートを差し出した。中井川の日記だった。おばさんも、日記を見てショックだったらしいけど、おれの名前はよく出てくるから、せめておれにはあいつの気持ちを分かってもらおうと思って、とおばさんは言っていた。あいつがどうして死を選んだのか。その隠された部分に踏み込んでしまうことに、おれは戸惑いを感じながらも、好奇心

には勝てなかった。ひどい話だ。クラスメートが自殺したってのに、おれはその死を好奇心で眺めている。

(効果音)

(ページをめくる音)

修

「4月10日。2年になってしまった。受験まであと1年9か月しかない。(中井川の声に)早く勉強を進めなくちゃ!

4月28日。まだ数Ⅱの段階だ。このペースじゃ遅いんだ。まったく、青春高校の先公たちは、なんて頭の切れないやつばかりなんだ。

5月9日。もうダメだ。家にいても、学校にいても、僕の居場所が全然ない。どこにいても落ち着かないんだ。だれか声をかけてくれ。

ナレーション

おれは、初めて中井川の人間に触れた。生きていたころは、顔すら思い出せなかったのに、今、あいつはおれの前で生き生きとよみがえっていた。生まれて初めて味わう、その存在感のリアルさに、おれの胸はドキドキ鳴っていた。あいつは、そうか、あいつは心の中で悲鳴を上げていたんだ。

中井川智宏

5月11日。見てくれた! 北川君がこの僕を見て笑ってくれた。今日は、いい日だった。

5月12日。どういことなんだ、北山君。君が昨日笑いかけてくれたから、僕は今日あいさつをしたのに。シカトするなんて! 僕は君に向かって、初めて、だけど自分でも驚くくらい、はっきりと「おはよう」と言ったんだ。聞こえなかったとは言わせないぞ。君まで僕を無視するのか?!

(モノローグ)

知らなかった。気づかなかったんだ、本当に。おれのせいになんかしないでくれよ。おれがお前を見て笑ったなんて、お前が勝手に思い込んだんじゃないか!

修(エコー)

大体、お前はな、人の気持ちってものを考えないんだよな。自分の行動に責任を持てよ、責任を!

(モノローグ)

そういうおれだって…。

恵(エコー)

かわいそうな中井川君。ごめんね、力になってあげられなくて。

(音楽)

<後編>

恵(エコー)

かわいそうな中井川君。ごめんね、力になってやれなくて。(

《タイトル》

ナレーション

おれは、この岡田の言葉を、やけに痛く感じている。自殺を選んだそれなりの理由はあったろうが、結局、自分の勝手に死んだんじゃないかって、冷たく見ていた。死を決意するまでの中井川の気持ちなんて、興味はあっても、同情なんて、これっぽっちもわかなかった。(間)あいつ、どうして死ななければならなかったんだろう?

智宏

5月19日。今週は、とうとう1週間、学校を休んでしまった。どうせおれなんか、いてもいなくても同じなんだ。ああ、でも来週は中間テストだな。行ってみるか。

5月28日——。

智宏の母 智宏、今日は学校へ行ってくれるの？

智宏 見れば分かるだろ。制服着てるんだから。

母 そうね。でも校章が着いていないみたいよ。

智宏 あ、いっけない。

智宏モノローグ (笑)今まで、頭のいい弟や小さい妹ばかり見て、僕に目もくれなかったお母さんが、小さな校章まで気を遣ってる。学校のズル休みが効いたんだな。やったぜ。

智宏 6月1日。やっぱりダメだ。青春高校はバカぞろいだ。僕はこの学校へ入るつもりはなかった。それを、中学の先公や父さんまでも——。ああ、僕が行きたかったのは、隣の高嶺高校だったんだよ。だれも僕の気持ちを聞いてはくれないんだもん。行きたい。高嶺高校へ行きたい。そうだ、3年の選択授業はオープンだって聞いてたし。ようし、行こう、明日。

9月4日。妹の千秋がお母さんに話してる声が、聞くとはなしに耳に入った。

妹千秋 お母さ～ん。お母さん、どこ？

母 はいはい、ここよ。どうしたの？

千秋 ちいちゃん、お母さんだーい好き。お母さん、元気？

母 ええ、元気よ。でも、どうして？

千秋 あのね、今日ね、幼稚園でね、怖い紙芝居見たの。

母 怖いのか？ どんなん？

千秋 あのね、「ママの手」っていうお話でね。牧ちゃんのお母さんが病気になってね。死んじゃったの。いつまで待っても帰ってこないの。

母 そう。ママが死んじゃったの？

千秋 うん。そしてね、朝に小鳥や熊さんや猫ちゃんがママの代わりに手をつなごうとしたんだけどね、やっぱりママじゃないからダメだったの。

母 そう。かわいそうねえ。

千秋 うん。泣きそうなお話だったよ。お母さん、死なないでね。ちいちゃん、いい子にしているからね。

母 はいはい。かわいいいちいちゃんを置いてかないわ。お母さんはちいちゃんが一番好きよ。お母さんの子どもの。(エコー)お母さんはちいちゃんが一番好きよ。お母さんの子どもの。

智宏 分かったよ。僕はいないほうがいいんでしょ。そのほうがみんなは楽しいんだ。前から感じてたさ、それくらい。だけど僕だって、お母さんに「好きだ」って言ってもらいたかった。だから一生懸命勉強したんだ、そして、いい大学入って、「いい子だ」って言ってもらいたかったんだ。でも、口には出せなかった。違うこと言っちゃいそうで…。僕はこの家にいてはいけないの、お母さん？

(モノローグ) 中井川、お前、そんなに悩んでいたのか——。お前のおふくろが二番目だとは聞いていたけど、だれも、だれも、お前の思い詰めた心を分かってやれなかったのか。おふくろさんは？ おやじさんは？

ナレーション その夜、中井川は、「ふろ場でカミソリを見つめた」って書いてあった。それで静脈を切ったらしいって。かみそりの刃は冷たかったそうだ。生きてるってこと

は熱いって。生きること。死ぬこと。あいつは本気で考えていたんだ。おれは、そんなこと思ったこともない。

智宏

9月6日。今日、クラスの岡田恵さんから手紙もらった。女の人から手紙もらったの初めてだ。短い手紙だった。でもうれしくて うれしくて、一字一句、なできるように何度も声に出して言うてみて、それでも足りなくて、今こうして自分の手で書き直してる。まるで子供みたいだ。

(書いてる感じ)「中井川君。どうしてですか？ 夏休みが終わっても、始業式に出たきりで、君の姿が見えないので心配しています。(途中から恵の声)だれも、君のことあまり気にしていないようだけど、わたしは君のこと、祈っています。おうちの中のこと、お友達のこと、勉強のこと、いろんな問題抱えてるのかもしれないけど、元気を出して。わたしも以前そうでした。この夏、キャンプで神様を信じて、変えられたんです。君も、神様を信じたら生き方が変わるんじゃないかと思って、思い切って手紙を書きました。では、クラスで会える日を楽しみに。さようなら。岡田恵。」

(モノローグ)

岡田、お前、神様って、クリスチャンになったのか？ そうか。今学期になってから、なんだかやけに明るかったもんな。中井川の葬式の時、それで、お前…。

恵(エコー)

かわいそうな中井川君。ごめんね、力になってあげられなくて。(泣く)

(モノローグ)

まるで、自分が悪いことしたみたいに、目を真っ赤にしてたっけ。——間に合わなかったんだ。遅すぎたんだ。

智宏

岡田さん、ありがとう。だけど、僕はもう疲れた。お父さん、僕はどうしてこの世に生まれたの？ どうして生きなくちゃいけないの？ 今までだって、いろんなことあったよ。なんとか頑張ってきたつもりだけど。もう力が出ないよ。これからは、生きたとしても、どんないいことがあるって言うの？ 人生さ、やっぱり悪いことのほうが多いしさ。本気で笑ったり、怒ったりできない僕だもの。無理だと思うんだ。それに、意味ないよ、僕が生きていたって。この世には何億って人間がいるんでしょ？ 僕一人いなくなったって、何も変わらないよ、学校も、この家も。意味がないんだ、僕には。生きていなくちゃいけない意味が。いなくてもいいんだね、お母さん。分かったよ。僕、いなくなるよ。ううん、怖くないよ、死ぬのは。ただ悲しいだけさ。もし岡田さんが言うように、本当に神様がいたら、一つだけ聞いてみたい。「僕なんかにどうして命をくれたんですか？」って。

(モノローグ)

ショックだ。こんなに自分の命、生きるってことに執着がないなんて。あんなに周りの人の愛を求めて、ずーっと求め続けて、あいつ、燃え尽きたんだ。

ナレーション

日記はそこで終わっていた。それから、団地から飛び降りた9月 16 日までの2週間、あいつは何を考え、どうやって生きていたんだろう。いや、考えることさえやめてしまったのか？ まるで抜け殻のように、この地上での最後の日々を寂しく、ひっそりと生きて、一人で死んでいったのか。

(モノローグ)

中井川… バカヤロウ！ それなのに、おれは、おれは…(男泣きに泣く)

(音楽)

(ブリッジ)

修 あ、岡田。

恵 あ、北山君。

修 ちょっと、いいか？

恵 いいわよ。なあに？

修 うん。中井川のことなんだ。ほら、葬式の帰り、あいつのお母さん、あいつの日記をくれたろ？

恵 ええ。中井川君、どんなこと書いてたのかなって、ずーっと考えてたの。読んだ？

修 ああ。おれさ、おれ、ほんと、マイったよ。こっちも考え込んじゃった。

恵 そう。中井川君、やっぱり、死ぬ前、まじめに何か悩んでたのね。

修 マジもマジ。おれ、あんなに人生について悩んだことないから。ショックだよ。あ、それでさ、その日記の中に、最後のほうに、お前の名前が出てくんだよ。あいつに手紙あげたんだってな、死ぬちょっと前。ものすごく喜んでた。

恵 ほんと？

修 ああ。それでさ、君もあいつのこと、もう遅いかもしんないけど、知っというほうがいいと思うんだ。日記、読んでくれよ。

ナレーション おれはこうして岡田恵に中井川の日記を渡した。3 日後、おれは岡田と会った。

恵 読んでてつらかった。もう中井川君、この世にはいないのに、まるで、わたしに語りかけているようで。“どうしてもっと心を開いて、わたしたちに飛び込んできてくれなかったの？”っていう思いと、“なんにもしてあげられなかった”っていう思いで、たまらなかった。

修 おれ…。笑うなよ、岡田。読み終わったあと、オイオイ泣いちゃったんだ。おれが中井川のために泣くなで、あの日記を読む前は思ってもみなかった。だけど、おれのこれまでの生き方、他人は他人、おれはおれって感じで、人のことにはまったく無関心でやってきたけど、今度のことで分かったような気がするんだ。おれの生き方は、おれの周りのだれかに、いや、一人一人に対して、なんか、うまく言えないけど、責任があるんだってこと。

恵 そうね。わたしもそう。彼が日記の中で言ってたこと、彼の悩みや悲しみや苦しみから出た一つ一つが、わたしの中で、まるでわたし自身のように分かるのね。この気持ち、他人のことを自分のことのように大切に考える心、失いたくないな。

修 岡田。お前、クリスチャンになったんだってな。俺も一度教会に連れてってくんないかな。自分なりに、“生きる”ってこと、考えてみたいんだ、もっと。

恵 いいわよ。喜んで。

ナレーション おれはその時、中井川の横顔をありありと思い浮かべていた。あいつのことは、決して忘れない。いや、おれの中で、これからもあいつは生き続けるだろう。おれが新しいおれになるために――。

<完>